

取っても、わが中国は日本と比べて、現代的な文明国の建設を目標としたら、まだまだ「任重く道遠し」と言えるだろう。

(蘇州大学専任講師／交換教員)

大学院に進学して

吉田 明梨

私は、昨年の三月に日本文学科を卒業し、昨年四月から大学院に進学した。現在大学院二回生だ。私も学部の一回生になった時には、皆と同じように卒業後は一般企業に就職しようと考え、就職活動を始めた。しかし、就職活動を進めるうちに、自らの進路に疑問が生まれた。就職活動は考えていたよりも上手くいかず、内定も取れないままだった。そのうちに卒業論文を書く時期となり、進路については保留のまま、日々を過ごしていた。

そんな時、夏休みに、ある先生から、大学院に進んでみてはどうかと勧められた。大学院は向いているのではないとも言っていた。その日のうちに私の心は決まり、大学院進学を決めた。何の目標もなく大学院に進んだだけでは意味がないと考え、学部生ころは一つもとっていなかった教職の講義を大学院でとることにした。

院生になって、客観的に今の学生を見ていると、私が学部生ころよりも保守的になったと感じる。私もどちらかといえば保守的な方だと思っただがより顕著になってきているように思う。講義の出席率はよくても、講義に積極的に参加しているようには見えない時もある。今度こんなイベント

花園大学
日本文学科
通信

第8号
通巻36号

二〇一五(平成二十七年)年六月十日発行
編集・発行 花園大学日本文学科
〒604-8456 京都市中京区西ノ京壺ノ内町八一
TEL (075) 811-1511(代)
振替 〇一〇五〇一〇一四三九九五

恩師『今井凌雪』先生からの贈りもの

森田 彦七

今井凌雪先生が逝去され、早四年目を迎えるうとしています。平成二十三年七月二十六日午前零時五十六分、私の携帯にご子息よりご逝去の報が入りました。ちょうどこの時、読売展の審査のため上京しておりました。奈良を出る前、病院に立ち寄り先生に『頑張つて来ます』と声をかけたのが最後でした。未だにご生前の姿が目には浮かび、書の指導に関してはとても厳しいながらも温かい顔で、また一旦、書から離れるとにこやかな顔で、私たち弟子にお若い頃の話をよく聞かせていただきました。郡山中学校時代や天理語学専門学校(現・天理大学)の話、その後戦地に赴かれたころの話等、ここには書ききれないほどの思い出をいただきました。月日が経過しても淋しさは今も私の脳裏から消えません。

私が先生に入門をお願いしたのは確か昭和四十六年六月であったと記憶しています。花園大学がまだ妙心寺東側にあった頃のお話です。たまたま今井先生が非常勤講師として出講され、その

トがありますよ、と先生が宣伝してくださっても、私以外誰も参加しなかったりする。何か新しいことを始めたり、知らない場所に行ったりすることは、確かに怖いものだ。しかし、一歩踏み出してみれば、意外とどうということはない。自分から逃してしまっているように見える。私もいつも新たな一歩を踏み出す時には不安でいっぱいだが、学生のうちにはできない経験もあると思う。私は昔から将来のことはあまり考えずに行き当たりばったりで生きてきた方だ。そのため、あまり人のことは言えなかった立場ではないのだが、今の学生には、少しでもいいので、自身の将来のことについて考え、さまざまなことに挑戦してほしい。(本学大学院修士課程在学学生)

編集後記

*ご多忙の中、ご執筆いただきました皆様方に対し、衷心より厚く御礼申し上げます。ありがとうございました。

*在学生の皆さんには、一日に一つでよいのです、昨日までの自分に新たな発見や気づきを加えて、自身の生活を充実させていたいただきたいと願っています。そのきっかけやヒントに、「本通信」掲載の文章がなれば、編集担当としてこれに過ぎる喜びはありません。

『花園大学 日本文学論究』第七号

(二〇一四年一二月刊)

・正保三年刊整版本『竹取物語』本文の成立
― 依拠した古活字本の検討

曾根誠一

・『発心集』の話末評言について

新聞水緒

・『小説神髓』における耽美志向

潘 文東

・豊かな言語生活のための国語教育

三宅えり

・『とりかへばや物語』について

坂下華菜

― 物語に於ける女東宮の存在意義

・椿實再評価

― 椿實を評価する資料の紹介と

「人魚紀聞」考

坂口仁美

・受贈図書目録(平成二五年一〇月)

同二六年九月)

・購入ご希望の方は、五百円(送料込み)を、お振り込み下さい。折り返し、郵送いたします。

*京都はこれから、高温多湿のしぎにくい時期を迎えます。体調には十分に注意して、講義や前期試験に臨んでいただきたいと思います。(曾)

日本文学会 公開講演会(聴講無料)

日時 六月二十日(土)

午後一時三〇分〜四時四〇分

場所 花園大学・自適館三〇〇教室

講演

記紀における神話的思考とその意味

花園大学教授 丸山 顕徳

戦中のベストセラー

火野葦平『麦と兵隊』

龍谷大学教授 越前谷 宏

校であるこの花園大学に勤めさせていただくことになり、これも天国から今井先生がもつと勉強しなさいと叱咤激励をいただいたものと思っております。

叱つてくれる先生がいなくなった今が自立できるかどうか試験の場だと思いつつ頑張っている昨今です。皆様、何卒よろしくご指導ください。(本学嘱託教授)



読む人を幸福にする贈り物

―『谷崎潤一郎全集』を編集して

明里 千章

折口信夫は「源氏物語は長すぎるのが不幸だ」と言いました。その長大さのために原文で全巻最後まで通読した人は少ないからで、須磨明石の巻あたりで読むのをやめてしまう(須磨(明石)返り)など、正しく読まれなかったために毀誉褒貶も生じました。

これは谷崎潤一郎にも当てはまります。かつて谷崎は「細雪」は長すぎたと述べたことがありましたが、そればかりではなく小説の題材が Sensual なせいで遠ざけられ、正しく読まれなかったために谷崎も毀誉褒貶にまわれまわりました。現に国語教科書に載るのは毒のない「陰翳礼讃」くらいで、谷崎を読まないのはいかにももつたいないことで、これは谷崎の不幸というよりは、谷崎文学の豊かな物語性と力に出逢えないことこそ、特に若い世代にとつて大きな損失で不幸と言わざるを得ません。

谷崎潤一郎は歴とした本名です。谷崎の先輩たち(逍遙、四迷、紅葉、露伴、一葉、鏡花、独歩、鴉外、漱石、子規、藤村、花袋、荷風ら)や後進の太宰治、三島由紀夫もペンネームです。「光輝ある美女の肌」へ「己れの魂を彫り込む事」(「刺青」を宿願として、八十年の生涯をブレることなく文学に精進し、本名で時代と戦いました。そんな自信と覚悟から生まれた「大谷崎」の文学が面

白くないわけがないし、天才は時代を先駆けるとはまさに谷崎のことで、時代がやつと谷崎に追いついてきた感があります。

「日本に京都があつて良かった」というコピーがあります。IT時代だからこそ、紙でゆっくり読む贅沢を通じて、谷崎文学が日本にあつて良かったと、日本語で谷崎が読める幸せを実感してもらえようように、編集委員として努めました。これまでの全集の不備を解消すべく、初めて「解題」を付し、新たに編成しなおし、全集本文は現代の読者にも読みやすくするよう配慮しました。今回の『谷崎潤一郎全集』全二十六巻(中央公論新社刊)は読む人を幸福にするために編まれた、全世界の読者への贈り物なのです。

大学生生活の思い出

西川 舞

一年前に書道コースを卒業しました。大学で過ごした日々を振り返ると、教育実習、中国への短期留学や書道部での活動など、様々な出来事がい浮かびます。

二週間の教育実習は、学校生活全般に渡って指導教諭の行動を観察し、真似ることで一日の勤務が如何に大変かを知ることができました。実際に授業を行なうと、専門性、そのほかの分野においても勉強不足であることを痛感しました。

短期留学は、中国の文化や生活を肌で感じることもできました。中国語の授業、庭園・博物館の

介護になった方数名、お風呂で亡くなった方、一度に重なった。今となつては余裕がなかったということ、利用者をごのように支援するかを考えたおし、さあこれからという時に全部失った喪失感だったと思う。正直なところしんどかった。利用者を担当できるのは、要支援の認定期間だけである。目立たぬように、やりすぎないように、必要な支援を適切な時期に行えるよう、これからも焦らずにやっていきたいと思う。

(本学一九九四年度卒業生)

任重く道遠し

洪 濤

中国蘇州大学日本語学部を卒業して、5年間あまり母校の教壇に立ち、2003年留学生として東京学芸大学の大学院に入り、2007年母校に戻った私は、この度交換教員として花園大学に派遣された。

八年ぶりの日本、見るもの聞くもの相変わらず驚きの種ばかり。

関西国際空港に着いたところ、入国管理局の行政効率の向上に驚いた。中長期滞在者が初めて入国する時、直接空港で在留カードを発給するという新しいサービスが開始されている。

空港で何時間も待つてくれた入試課の塩見さんが宿舍まで案内し、用意周到に生活必需品を一通り準備してくれた。

そして何よりも新学期が始まつてから、校庭で何処でも見られる身障者学生の陽気な顔に目を見

見学や町の探索はとても楽しく、その情景をふと思い出します。携帯電話を紛失し、急性腸炎のため病院へ行き、先生や友人に迷惑をかけてしまいました。それが今では良い思い出です。また、家族と三週間離れて過ごすことが初めてだったので、当たり前だった家族の存在に改めて気づくことのできた良い機会でもありました。

書道部は諸事情により途中退部しましたが、活動中は建仁寺塔頭西来院での展覧会など、貴重な経験をさせていただきました。また、夏の合宿や各展覧会前の錬成会では批評会があり、苦手な鑑賞力を養うことができました。

現在、私立高校で芸術科書道の非常勤講師をしています。大学時代は書くことばかりで、しかも、文字の形を真似ることしかしていませんでした。いざ、教壇に立つと、自ら作品を創作することができません。積極的に考え、疑問を持つことをしてきていなかったからです。授業のない空き時間や放課後は臨書に明け暮れ、様々なパターンを頭に叩き込みました。失敗も多く、納得できる授業はまだまだできそうにありませんが、生徒が笑顔になり、「書きたい」や「おもしろい」と意欲的な姿勢に変化していく様子を見ることができると、とても嬉しく次への糧になります。書の技術も人間的にも未熟ではありますが、日々研究を重ね、技術や知識を増やし、授業で生かすことができるよう邁進したいと思います。

(本学書道コース二〇一三年度卒業生)

張った。中国の大学には身障者がいないわけではないが、極めて少なく、新入生に身障者がいれば、学校側が大いに宣伝するほど大げさな出来事さえあって、これがご本人に對しかえって大きな迷惑かもしれないという意識が全くない。日本は違う、日常の行き届いたサービスで身障者学生への思いやりを無言のまま表している。講義棟に身障者専用の出入り口、専用トイレの確保、学期初めに教務課から全教員に配布した「障害を有する学生への配慮・支援について」のお知らせ。授業開始後は、自分の授業に身障者学生がいる場合、また教務課から「要配慮学生の登録についての連絡・依頼」を配られる等、今の日本社会が差別を除去するため如何に力を尽くしているのかを物語っている。

勿論ちよつと行き過ぎかもしれないと思うところがある。また身障者学生のことを例にすると、その分類に考えさせられる所がある。視力、聴覚、肢体不自由の障害は理解できるが、精神面の障害はどう理解するのか頭を傾げる。その症状は教務課の「要配慮学生の登録についての連絡・依頼」に「緊張、不安、電車や学校や教室に入れない、授業中に不安になり教室を出て、気持ちを落ち着けて再入室することもあります。」など、担当教員としてどう配慮するのかはなはだ困惑する。

が、これは行き過ぎだとしても全体の流れから見れば「玉に瑕」にすぎないと思う。中国は今実質GDPがもう日本を超越して世界第二位というめでたい経済成長を世に見せているが、国内の差別問題を下手に扱えば社会を動揺させる大問題になる。だから「差別」というキーワード一つだけ

「バトンを渡す」

藤田 陽子

ホームヘルパー、介護認定調査員、地域包括支援センターの主任介護支援専門員。私が市役所のヘルパー職として採用され、今日まで携わってきた業務である。今は、高齢者の多岐に渡る相談、要支援認定者のケアプラン作成、認知症サポート・養成講座等の講座開催、地域ケア会議という多職種の会議運営を行う等、日々の仕事をとにかくなすのに精一杯で余裕のなさを感じている。職場の雰囲気も張り詰めた空気が漂い、どうにも重たいなあと感じている。

そんな中でも勇気づけられたり、癒されたりするのは、担当している利用者宅への訪問だ。年齢も環境も異なる利用者の人生は様々で、色々な事を教えられると同時に、波乱万丈な人生もある。困って支援を受けたいという利用者から、病歴や家族のことを聞くのは気を使う。最初にどこまで

尋ねるかも結構悩む。私が気をつけていることは、待つということ、時間がない中でも丁寧に対応するようにしている。ゆっくり話を聞きたい気持ちと、訪問後に控えている仕事がちらついで、落ち着かない様子が利用者にも伝わるので、あかんなあと思う。私ではない職員が担当した方が利用者も幸せちゃうかとも思い複雑だ。昨年の4月頃は、色々な利用者との別れがあつた。利用者の介護度が変わりなり要介護になると、ケアマネジャーに利用者の支援を引き継ぐ。体調悪化で要